

朝食後テレビに合わせ黙禱^{もくとう}す娘は隣で授乳している
 (福山市) 倉田ひろみ
 幼な子のごとば湧き出すカンブリア爆発のご
 (船橋市) 小野口公也
 と盛夏のいのち
 (アメリカ) 大竹幾久子
 車輪なき渡米時の鞆^{かばん}いまもなおこのアメリカ
 で曳き続けおり
 (名古屋市) 百々 奈美
 跳ねながら横断歩道の白だけを踏もうとする
 子国籍問わす
 (豊橋市) 滝川 節子
 幼子を抱えた母は放心し片隅にあり広い避難
 所
 梨を待つ列の人びと口ぐちに果汁と甘さと歯
 さわりを言う
 (観音寺市) 篠原 俊則
 炎天下ブルーカラーが人間でホワイトカラー
 はAIと知る
 (八王子市) 額田 浩文
 声でかい君がたまに小さな声でしゃべるとま
 るで異星人だね
 (埼玉県) 高柳 茂
 ベンチにて投手三人談笑す 話題はたぶん野
 球ではない
 (所沢市) 小林 樹
 夏休み帰省した人をみな乗せて車はにわかに
 重くなりたり
 (仙台市) 小室 寿子

【評】一首目、娘のような人もその瞬間に亡くなった。淡々とした表現が重い。
 二首目、爆発的に言葉の増えてゆく幼な子だ。三首目、車輪のない古い鞆は心の支
 えでもあろう。七首目、人間とAIとの共存だが、炎天はその奇妙さをあぶり出す。

ホバリング加速減速急旋回梅雨明けのそらこ
 うもりがまう
 (盛岡市) 榎本 拓
 道端に多くの供え物があり皆に愛されてた地
 域猫
 (東京都) 白河 清
 放課後の夕日差し込む理科室で明日の実験準
 備完了
 (東京都) 鳥川 健朗
 地震後の十年間に父は逝き今また揺れる熊本
 の母
 (アメリカ) 富永 和歌
 西空に湧き出づるとき鵜の大群多摩川上空
 ひたすら下る
 (昭島市) 奥山 公子
 竹籠をひとつ作り終へ思ひやる竹の一生籠の
 一生
 (つくば市) 柳町 健二
 話しつつうつらうつらと居眠りす介護士の友
 は夜勤あけらし
 (東京都) 唐木よし子
 大鳴門橋で鳴門の大渦に怯えて鳴門のわかめ
 と帰る
 (枚方市) 坊 真由美
 大学生二人現れ会場の空気が変わる平和のつ
 どい
 (神奈川県) 神保 和子
 熊が入らぬやうドアを閉めよと書かれあり大
 曲駅東側トイレ
 (可児市) 前川 泰信

【評】第一首、第二、三、四句の途中まで漢字にして、独特のニュアンスを出し
 ている。第二首、猫の死をうたって独特。「地域猫」という新しい言葉をうまく使
 ってみせた。第三首、作者は中学か高校の教員だろう。